



楽しい絵手紙

昔から山遊びする子供の絶好のおやつとして親しまれてきた。運よく見つけることもあるが、発見が難しく珍重された。美しい薄紫の器の中に、白くトロリとした甘い実は、子供時代の幸せの甘さであった。

あけび（木通）は「開け実」が転じたものと言われている。

八女川柳会 安達 昇



今月の山柳

太陽の恵み貰った山の幸

川の情景 ④ 山太郎蟹

矢部川に生息する魚類の中で、最も美味しいと言われているのが山太郎ガニです。

本名は藻屑蟹と言い、ウナギ同様海で産卵・孵化した後、2～3月頃満ち潮に乗り川を遡上し、成長しながら矢部川の中流域及び小河川に棲みつきます。その後数年で親ガニになると、主と呼ばれる大型のオスは800g程に成育したのが稀にいます。そして川面に秋風が吹き、柿の木の葉が色づいて一雨降ると、産卵のために有明海目指して落ちていきます。

この時期のカニは、姿煮・カニ飯・カニ汁等調理されますが、山太郎ガニはシーズンが短く、特に最近は漁獲量が激減し、食卓に上る機会も少なくなっています。

数年前久し振りに帰郷した友にカニ飯と姿煮を振舞ったところ、『昔はドケデンバサロおったもんナイ、巢穴に手突っ込むと指ば挟まれた』と、昔話に華が咲いたので、後日福島の方Mさんに頼み矢部川産の一番型のよいカニを煮てもらい送ったところ、

『上海蟹は問題ならん、こげんうまかカニは滅多に喰われんバイ』と、感激の便りを呉れました。今後このような情景に遭遇できるかどうか？『矢部川の美味しい山太郎蟹』も夢物語となってしまうような、そんな気がする今日この頃です。

注：上海蟹と藻屑蟹は見た目は全く同じです。 内藤 洋臣（黒木町）



矢部川源流・杉の里の四季 ②⑤

ミゾソバ(溝蕎麦)[タデ科]

ミゾソバは小川や沼沢地などに生育する一年生草本。水田地帯の水路などに群生していることが多い。和名は溝に生育し、葉がソバに似ているから、別名の「うしのひたい」は、葉の形が牛の顔に似ているからである。

矢部村では9月～10月の稲刈り頃に花が咲く。花卉に見える部分は萼(がく)であり、花卉はない。葉を乾燥させ、煎じたものに利尿などの効能がり、生の茎には止血や鎮痛作用があるとされている。

松尾 重根(黒木町)



秋の草花

落ち葉が風に舞う頃となりました。公園を散歩していると鈴虫やコーロギの鳴き声もほとんど聴かなくなり、暮秋を体で感じます。草花の景色も夏とはずい分と変わってきました。私は四季の中で一番秋が好きで、そして秋の草花が大好きです。秋に茎を伸ばす可憐な花の吾亦紅、芒、秋桜、秋の七草の一つ女郎花等が好きです。散歩の途中で秋の草花や照葉を見付けては、利休所持であったといわれる桂川(京都)の魚籠(香雪美術館

蔵を、近代(明治以降)になって白峰斎という方がうつされた物に生け、雰囲気を楽しんでおります。利休七則の中に「二、花は野にあるように生け」とあります。自然体で季節感を大切にする、ということでしょうか。秋から冬に移り変わるの早いもので、今、この季節を存分に味わい、雪の景色が近づくのを、それ又楽しみたいと思います。

服部 ゆみ子



ます。休みがちな私は他の方達にお世話かけてるのでは...と思ったりします。大坪先生、会の皆さん、本当に和やかで気さくないい方ばかりで気楽に参加できて楽しい時間です。これからその季節折々の自分の身近にあるいろいろな花々や果物など日々の暮らしの中で見つけながら楽しんで描けたらと思っております。皆さん、彩和の会をちよつと覗いてみませんか。



八女市酒井田 片小田 常子

紙サ 絵手 和の会 常子 入会 数年 した うち

人生・健康が一番 ⑥ マラソン人生の優勝者

ある田舎のマラソン大会に参加した時、「本当に走られますか？」と問われた事がある。「走りに来たのに失礼な・・・」と思いながらも、70歳代の老人が長距離を不思議がられたのも無理もない。いま、マラソンに例えると、折り返し点を過ぎた辺りに来たのだろうかと思う。35キロ前後からが、股関節が引っ張るか、心肺機能がパンクするか、日頃からの一步一步、練習で積み上げた体力の真価が試される。また、栄光のゴールを這いつくばってでも目指す強い精神力が求められる。自分との闘いである。

思い浮かぶのは角保初代会長(八女市蒲原)。高血圧・糖尿病・腰痛等に悩まされていた先生が、西ドイツ・スポーツ医学の権威であるファン・アーケン博士との出会いから、はじめてマラソン大会に出場されたのが、昭和47年「第1回天草パールマラソン」。(当時65歳)第1回大会から25年間連続出場の特別表彰受賞。数千のランナーを代表して選手宣誓をされたあの勇姿は、今でも脳裏から離れない。他にも、85歳でホノルルマラソン7時間5分14秒で年代別優勝。91歳の現役ランナーとして大濠マラソン2キロを15分54秒で完走等の記録。会場で大勢のランナーを前に報道関係等のインタビュー。健康長寿の秘訣「人間も動物、野山を駆け巡り、食べ物は玄米菜食」の持論を誇らしげに語られていた。ゴール時の晴れやかな表情から「真の人生マラソンの優勝者」の姿を連想する。

完全に健康を取り戻された先生は、マラソンの「健康に対する効用」を自分だけ享受するのはもったいないと、昭和52年、八女走ろう会を設立、全国区の著名ランナーとして健康マラソンの実践・普及に貢献された。先生の遺志を受け継いで、現在65名の仲間が八女走ろう会に結集している。残念ながら先生は、庭木を剪定中、脚立から落下骨折、運動が出来ない身体となり、それが原因で生涯現役の人生を閉じられた。

八女走ろう会 徳永 意信

阿蘇を「世界」に推薦！

豊かな地域資源を活用した自然公園「ジオパーク」の普及を推進する委員会は熊本県の「阿蘇」を世界ジオパークに推薦することを決め、来年の秋にも認定の可否が決まる。

決定されれば九州では雲仙岳に次いで2地域目となる。その理由として「現在も続く火山活動を体感でき、巨大なカルデラが売り物になっている」と述べている。

さて私達登山グループは、この推薦には大賛成である。

何回登っても飽きることがない圧倒的なスケールの大きさ、そして気が遠くなる程の歳月をかけてできた噴火の地層は、大いなる古代のロマンさえ感じる。吉田隊長が感動し「阿蘇は世界遺産だー」と叫んだ。

ジオパーク委員会では地元自治体の活動が活発になったことを評価しており、私達も阿蘇を「世界」にとエールを送っている。

八女文化連盟写真部 樋口 清人

